

暮らしの復興とは何か

—復興の「内がわ」と「外がわ」の対話より

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科	教授	阪本真由美
京都大学大学院 人間・環境学研究科	准教授	前田昌弘
NPO 法人ふたば 震災学習ラボ	室長	山住勝利
人と防災未来センター 研究部	主任研究員	高原耕平



1. 復興をめぐる問い

阪神・淡路大震災から28年が経過した。阪神・淡路大震災により大きな被害を受けた地域でも時間の経過とともに震災の痕跡は消え、災害があったことを思い起こすような風景を見ることは難しくなっている。著者（阪本）の勤務先は、阪神・淡路大震災の経験を生かし次世代の防災を担うリーダーの育成を目指して設置された大学院であるものの、阪神・淡路大震災よりも、近年起こった災害に関心を持つ学生の方が多い。阪神・淡路大震災があった1月17日前後以外は、阪神・淡路大震災について伝える報道も今ではほとんどみられない。その一方で、阪神・淡路大震災の追悼式典や震災に関係する行事には被災した人が多数参加しており、それらの人の話からは未だに復興が継続しているようにも見える。

本研究では復興とは何であるのかを、地域の暮らしに着目し、阪神・淡路大震災を経験した人／経験していない人の対話を通して検討する。これまでの復興をめぐる議論には、復興プロセスに直接携わった人の声を聞くものが多くみられる。これに対し、本研究ではそれらの人だけでなく、阪神・淡路大震災を知らない世代の声にも着目し検討する。

2. 「復興」をめぐる対話の場づくり

復興についての多様な人の声を知るための対話の「場」として、「復興ダイアログ」を開催することとした。ダイアログの参加者は市民から、運営の担い手（サポーター）は震災を知らない世代（高校生・大学生・大学院生）から募った。サポーターとしては、高校生・大学生・大学院生16名から応募があった。

復興ダイアログの実施に先駆け、サポーターとともに何をテーマに復興を議論するのか、ワークショップ形式で検討した（2021年8月24日実施）。参加者から提示された意見を整理した結果、以下の4テーマが選定され、これらのテーマに基づきダイアログを企画・実施することにした。

- ・ 何が達成されたら復興か
- ・ 眼差しと街並み
- ・ 「被災者」って誰のこと
- ・ 「復興」の内がわ、外がわ

ダイアログの開催実績を表1に示す。ダイアログは、2021年10月～2023年3月にかけて計8回実施した。第1期は2021年10月～2022年3月にかけてであり、前述のテーマで4回実施した。その後、振り返りを経て、第2期（復興ダイアログ2nd）として2022年7月～2023年3月に4回実施した。本論では、これらの対話から、「復興」とは何かを考える。

本論の構成であるが、第3章に第1期ダイアログの概要を、第4章に第2期ダイアログの概要を述べる。そして、第5章にダイアログの取り組みから示される復興について考察する。

表1 復興ダイアログ開催日時

	年月日	テーマ
復興 ダイアログ	2021年10月16日	なにが達成されたら「復興」
	2021年12月12日	眼差しと街並み
	2022年2月12日	「被災者」って誰のこと？
	2022年3月19日	「復興」の内がわ・外がわ
振り返り	2022年6月29日	ダイアログの振り返り
復興 ダイアログ 2nd	2022年7月30日	「モノ」から復興を考える
	2022年9月25日	街並み
	2022年11月3日	職でつなぐ災害に強い地域づくり
	2023年1月29日	映像アーカイブの役割—記録すること、集めること、残すこと
番外編	2023年2月20日	東日本大震災と「創造的復興」
振り返り	2023年3月29日	ダイアログの振り返り

3. 復興ダイアログ

(1) 何が達成されたら復興

本章では、第1回～第4回のダイアログの概要を述べる。第1回のダイアログは、阪神・淡路大震災時に神戸市職員として、外国人、生活困窮者、ホームレス等のマイノリティ支援に携わった菅本郁さんの話題提供からスタートした。阪神・淡路大震災において避難所への受け入れを拒否されたホームレスや、震災により在留許可延長の手続きが取れずに不法滞在になった外国人等、復興過程において排除されていたマイノリティ支援をめぐる葛藤が紹介された。マイノリティの問題は、平素の生活においても見えにくいため理解されにくく、問題と認識されずに埋もれてしまいがちである。そのような状況が災害時には一層深刻な問題となって表面化した。

話題提供後の議論では、目に見える復興と目には見えない復興があること、すでに復興したように見えても所々に取り残されている復興があり、それらが見え隠れすること、そのような課題について震災を経験していない人が語ることの難しさについての意見交換が行われた。

(2) 眼差しと街並み

阪神・淡路大震災の特徴の一つが住まいの被害が大きかったことである。第2回のダイアログでは、阪神・淡路大震災後の復興まちづくりについて小林郁雄さん（兵庫県立大学）から話題提供があった。復興は「ゴール」ではないことや、「すまい」「まち」「しごと」が全体として再生される必要があると述べた。参加者は話題提供を受けて議論したいキーワードを紙に書いて提示し、そのなかから『『もとの』くらして戻れるの?』がテーマとして選定され議論が進められた。

参加者のなかには阪神・淡路大震災を経験した人もおり、それらの人からは、「もとの暮らし」を取り戻したい、復興計画は間違いだったのではないかと、という意見が出された。その一方で、「もとの暮らし」とはどの時点の暮らしなのか、「もとの暮らし」が何か

を考えることも大切なのでは、という意見もあった。

(3) 「被災者」って誰のこと

第3回のダイアログでは、「被災者」とは誰のことか、哲学者ウィトゲンシュタイン研究者の古田徹也さん（東京大学）から話題提供があった。「被災者」を、文字から定義すると「災いを被った者」となるものの、それは誰までのことをいうのか、いつまでのことをいうのか、線引きの基準としては役立たないのではないかと。例えば、罹災証明書を発行された者だけが被災者なのか。証明書を申請しない、申請できない、申請してもらえない人も被災者なのか。これらの物事を考えるとき、被災者が誰なのかを定義することよりも、被災者という言葉を用いてどのようなやりとりをしようとしているのか、「家族的類似性」⁽⁴⁾の観点を含め検討することが示された。

意見交換においては、本質を探ることに意味があるのか、それとも定義づけが与えられることに意味があるのか、そうするとそこに該当しない人が排除される可能性があり、それに問題があるのでは等の意見があった。

(4) 「復興」の内がわ、外がわ

第4回のダイアログでは、内からみた復興／外から見た復興について、阪神・淡路大震災の復興まちづくりに携わった松原永季さん（スタジオ・カタリスト）から話題提供があった。阪神・淡路大震災後により被災したまちを歩き、撮った写真が紹介された。震災後に建てられた家には通りに面した窓を減らすというように分断・孤立の傾向があるものの、外に向け何らかのメッセージを発信し、他者とのコミュニケーションを求める様子が表象されているものもある、というように震災後のまちなみも変化していた。

その後、参加者は実際にまちを歩き、復興を伝えると感じる写真を撮影し、それらの写真の中から1枚を選定し共有した。写真は、キーワードとともに紹介され、それらの中から全員で優先度が高い写真を選んだ。その結果、「こんせき」「道路」「意思表示」というタイトルの写真が選ばれ、写真を中心に復興に関する議

論が行われた。

「こんせき」(写真 1) は、もともとは二軒だった家の一軒部分が切り取られ、かつては家があった跡が残された写真である。写真について講師の松原さんからは、広島原子力爆弾により壁面に影が残された家(原爆タイプ)と類似していることや、他の参加者から京都でも長屋の半分が切り取られた類似した事例があるという話があった。



写真 1 こんせき

「道路」(写真 2) は路面が「ツギハギ」「パッチワーク」となっているものである。講師からは、災害の整備事業として普通の道路はアスファルトで仕上げるものの、道の出口や入口についてはインターロッキングブロック^②とするための予算がつけられたこと、昔の雨水用の側溝がレンガだったものが残されている等の説明があった。

議論では、まちづくりでは住民同士での合意が必要だったけれども合意形成のあり方が多様だったこと、それまで気にしていなかった道路、建物が持つ意味を知ることができた、という意見があった。

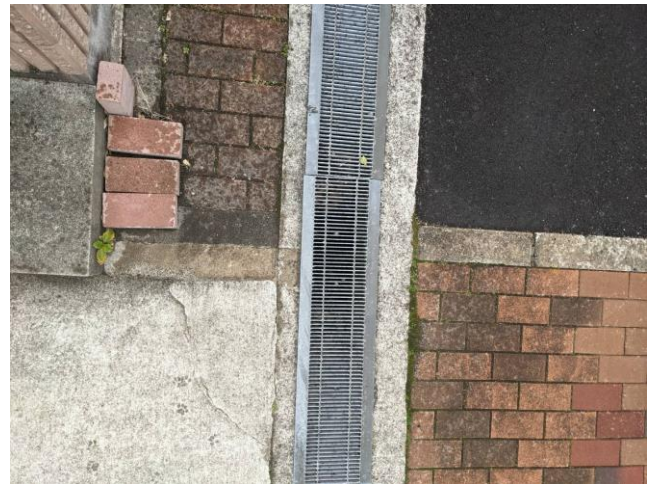


写真 2 道路

(5) 復興ダイアログの振り返り

以上に述べた復興ダイアログにおいては、講師による話題提供を通し、復興についての活発な議論が繰り広げられた。まち歩きのような取り組みでは、参加者が感覚的に復興を捉えることができていた。

そこで、より復興を感覚的に感じることができるテーマとして、「モノ」「まちなみ」「食」「映像」に着目し、第 2 期のダイアログ(復興ダイアログ 2nd)を行うことにした。

4. 復興ダイアログ 2nd

(1) 「さわる、そっからかんがえる」

第 2-1 回目のダイアログでは、高原耕平さん(人と防災未来センター)を講師に、モノをテーマとして復興を考えた。モノはミュージアムには保管・展示されているものの、それらのモノには基本的に触ることはできない。展示され、触れないモノから伝わることはあるけれども、体のモードが制限されるので、感じることや、出てくる言葉も制約される。そこで、人と防災未来センター研究部で開発中のワークショップ「さわる、そっからかんがえる」を実施し、阪神・淡路大震災のときに実際に避難所で使われていたモノを自由に見て、触り、匂い、感じたことをカードに書き出し意見交換を行なった(写真 3)。意見交換の事

例は以下の通りである。

「おしぼり」 長年不使用のまま乾燥した「おしぼり」が多数あった。当時の避難所の衛生環境はどのようなものであったのだろうか。いつ水分がなくなったのだろうか。袋の印字から岡山県からの支援だったのか。

「飲料水バッグ」 きれいな水を確保するのは大変だった。埼玉県戸田市と印字された飲料水バッグだった。遠くから支援物資が届いたことを感じた。ポロポロになっていた。

「食べ物」 まだ食べられそうなものもある。乾パンはまだ食べられそうにみえる。歯が砕けそうなくらい硬そう。

「ボディソープ」 まだ香りが残っている。しっかり匂いがする。

「水の要らないシャンプー」 匂わないと書いているけれども、匂いがついているように思う。

これらのように参加者はモノに触れ、感じることであり、それらのモノを活用した生活についてよりリアルな感想を述べていた。また、モノに向き合う時間が長くなると多様な視点が提示されることや、今見たものがどのようにこれまで保管されていたのか知りたい等の意見がだされた。



写真3 モノに触れ考える様子

(2) まなざしとまちなみ

第2-2回目のダイアログでは、第4回のダイアログで話題提供があった松原永季さん（スタジオ・カタリスト）からの話題提供後に、前回とは異なるエリア（駒ヶ林エリア）を中心に、「復興」の気になるまちなみについての写真撮影と意見交換が行われた。

選定された写真の一つが「お地蔵様」である（写真4）。地蔵は2体あり、サイズが異なり、台座だけがあるものもある。震災の被害を受けたのか、受けていないのかわからない。地蔵の横の住宅には物干し竿がある古いまちなみ印象的、との紹介があった。講師からは、道が真っ直ぐであることから大正時代にできた街並みである。このエリアには大正時代にできたまち、昭和時代にできたまち、2000年くらい前からある漁業集落が混在していること等が紹介された。

参加者からは「地元に住んでいるものあまり行ったことないエリアであり新鮮だった」「震災の前後、再開発だけでなく、さらにその前がどのようなまちであったのか、漁村集落だったことも初めて知った」「自分とは異なる視点で撮られた写真を見て、話を聞くことにより新しいものが見えてきた」等の意見が出された。



写真4 お地蔵様

(3) 食でつなぐ災害に強い地域づくり

第2-3回目のダイアログでは、平成30年7月豪雨により被害を受けた愛媛県宇和島市で、食を通した

支援に取り組む NPO 法人うわじまグランマの松島陽子さんの話題提供により、災害時の食について議論した。松島さんは、土砂災害、浸水被害が発生したなかで日々変化する状況を目にし、自分たちに何ができるのかを考え、同級生 5 人で食を通した支援活動をスタートした。避難所には行政からの弁当が配布されていたものの、公民館などに避難している人には支援が行き届いていなかった。災害から 6 日後に避難している人から「炊き出しをしてほしい」との意見が出されたが、炊き出しの仕組みもなかった。被災地には砂埃が多く炊き出しが困難だったため、ボランティアで弁当を作り届ける活動を行なった。支援に取り組む過程において、地域では過疎高齢化が進み、孤立している人がいることへの気づきがあり、人がつながれる場を作りたいと考え、現在は子ども食堂に取り組んでいる。子ども食堂は、地域食堂としての役割も担っており、災害により希薄になりつつある地域コミュニティを復興させる拠点として活用し、いずれは南海トラフ地震の食のサポートネットワークとしたいとの話があった。

意見交換では、今実施している「備え」がどのようなものなのか、災害時にホッとする食とは何かを考えた。ホッとする食については、「温かい」「汁」「味噌汁」「ご飯」などが共通して挙げられた。また、災害発生後にはストレスで何も食べられない人がいる一方、逆に食べすぎてしまう人もいることや、避難所での食事は温められるか／常温で食べるのかでも違う、パサパサしているものは喉を通らない、トレイに行かないために分量を控える人もいる等、被災後の食について具体的な意見が出された。

(4) 映像アーカイブの役割

第 2-4 回目のダイアログのテーマは「映画・映像」であり、神戸映画資料館の田中範子さんを講師に、映像を通して復興を議論した。神戸映画資料館は 2007 年に新長田に開館した。震災復興のまちに開館したこともあり、開館から半年後に震災と関連する企画を考えた。そして「震災後のまち、人々の様子を撮影した

映像」を市民から募り、応募のあった作品の上映会を 2008 年 1 月に行った。ダイアログでは、それら作品の一つである「震災の数ヶ月後、復興する街で頑張る郵便配達員の風景と新長田の風景」が紹介された。これは、郵便局員が全国からの支援への感謝の気持ちをこめて被災地の様子を伝えるために作成された映像であった。映像には、被災した新長田で郵便を配る郵便局員の様子が映し出されていた。火災で燃えたビルの 1 階のオフィス、郵便物が溜まったまま人のいない家、倒壊した家屋で塞がれた道路を迂回し、郵便物を配達する様子が映しだされていた。郵便配達は、郵便局員にとっては日常ではあるものの、そこで映されている風景、聞こえる工事の音等は復興過程にあるまちの様子を示すものであった。

議論では、映像で見るまちの情景にそれまでは知らなかった発見があったこと、「郵便の受け取り手のいない家に住んでいた人はどこに行ったのだろうか」「日常と変わらず淡々と郵便を配達する人の様子が印象的であった」等の意見が出された。また、テレビ番組制作に携わっているという参加者からは「震災関連の番組制作では下調べをして撮影場面を取捨選択して番組をつくるが、そうではない映像が印象的だった」とのコメントもあった。

その後、「日常をどう記録するのか」について話し合いが行われた。映像としてつくと「編集された日常」になってしまう。とはいえ、自分から日常を撮影することは難しい。映像と復興との関係性は何なのか。被災のを知り、そこから復興を考えるのが良いのか。映像を見るからこそ想像できるものがある。当時の情景と現在とでは変わっていないところ(密集市街地であるところ)が見られる等の意見があった。

5 復興とは何か

本章では、以上に述べたダイアログの取り組みを通して、復興とは何であるのかを考察する。

ダイアログの参加者には、阪神・淡路大震災を経験し今もそこで暮らす人(復興の「内がわの人」とす

る)と、阪神・淡路大震災を知らない地域・世代の人(復興の「外がわの人」とする)がおり、復興の内がわの人/外がわの人の中には、復興をめぐり以下のような捉え方の相違があった。

第一に、復興の原点となる「もとの〇〇」についてである。復興の内がわの人には、復興を「もとの暮らし」「もとのまち」を取り戻すこと、と語る人がいた。これに対し、外がわの人からは「もとの」が意味するものがどの時点のことなのか、阪神・淡路大震災があった時なのか、それ以前なのかかわからない、という意見がだされた。復興の外がわの人には「もとの〇〇」は捉えにくく、それを理解するには、阪神・淡路大震災が起こる前の様相を知る必要があった。

第二に、災害からの時間の経過の捉え方の相違である。復興の内がわの人には阪神・淡路大震災から今に至る連続した時間の流れがあり、阪神・淡路大震災を振り返ることは、忘れていたことを回顧するレトロスペクティブな行為であった。それに対し、災害の外がわの人にとっての災害とは、今とは異なる分断された出来事である。復興を知るには、災害が起きた時の情景をイメージし、その時と今とがどのようにつながるのかを考えなければならない。

第三に、復興プロセスには「ツギハギ」「パッチワーク」という言葉で表されるような不均一な側面が見られる点である。まちなみも、均一に再建されたところもあれば、被災していないところ、中途半端に再建されているところもある。これは、災害による被害が場所により異なったことだけでなく、まちがもともと抱えていた歴史、震災後のまちづくりをめぐる合意形成のプロセスが異なったことによる。ただし、復興の外がわの人にとってはこれらの不均一さが、復興によるものなのか、それとも震災前からなのかは見分けにくい。

以上の議論が示すように、復興の外がわの人には、復興のスタートとなる「もとの」姿は定かではなく、震災後どのような経緯で今に至っているのかも不明瞭であり、その姿は「ツギハギ」で見えづらいものとな

っている。

復興とは何なのか、当時の政策統括者だった貝原俊民県知事は、「創造的復興」とは、単に震災前の状態に復旧するのではなく、震災の教訓を生かして21世紀にも通用する地域として復興すること、それは武力や経済力といったこれまでの文明が追い求めたハードパワーではなく『平和の技術』といったソフトパワーの開発であると述べている。また、復興計画を被災地の外でつくるのではなく、被災の教訓をもとに、被災者が自らの手でつくってこそ、苦難を乗り越えて復興に取り組むことができる、という五十嵐広三官房長官の言葉についても触れている。これらの記述からは、復興は被災者と共同して震災を乗り越え新しい未来を創造するという、プロスペクティブな理念として位置づけられていたことが伺える。しかしながら、時間の経過とともに、いつしか復興は震災を契機に始まった種々の取り組みを回顧するレトロスペクティブなものとして位置づけられるようになっていく。復興の外がわの人にとってレトロスペクティブな行為は難しい。そのような復興の外がわの人が、内がわの人の復興をたどることは可能なのだろうか。

今回ダイアログが取り上げたのは、「被災者」「まちなみ」「モノ」「食」というような地域を生きる人々の暮らしと密接なテーマであった。これは、人々の「暮らし」の観点から復興を考えるという試みでもあった。「暮らし」という観点から復興を捉えると、それは災害によりもたらされた非日常ともいえる状況が、時間の経過とともに日常になっていき、いつしか日常のなかに非日常が溶け込むプロセスであった。非日常が日常に溶け込んでいるので、復興の境界は曖昧なものとなっている。つまり、暮らしの復興とは、日常/非日常を行き来するプロセスとして位置づけられる。

このことは、何が震災による日常/非日常なのかを知ることにより、暮らしの復興を知ることができるという可能性を示している。復興ダイアログの参加者は、モノ・まちなみ・映像を通して、日常に溶け込んでいる非日常に対する気づきを得ていた。つまり、日

常を伝えるメディア（モノ、まちなみ、映像）と復興プロセスに携わった人とのコラボレーションは、復興の外がわの人が復興を知るトリガーとして機能し得る。本研究を通して新たに示された、暮らしの復興という概念や、震災をめぐる日常／非日常のプロセスについては、復興の記憶の世代間継承の可能性を秘めていることから、今後さらに研究を深めたい。

補注

- (1) 後期ウィトゲンシュタインにおける、多様なものを共通の本質でまとめ上げるのではなく、（父親と娘の目は似ていて母親とは鼻が似ているといった）家族のように類似する連関として捉える見方。
- (2) 舗装ブロックのことで、ブロックを相互にかみ合わせる事により強度を得るもの。

参考文献

- 1) 貝原俊民（2009）、兵庫県知事の阪神・淡路大震災 15 年の記録, 丸善株式会社.